

[研究報告]

母校の教育に模擬患者として参加した新人看護師の 経験における気づき

宮國友美¹⁾, 高良武博²⁾, 比嘉貴子³⁾, 上間直子³⁾

抄録

目的: 新人看護師が母校の教育に模擬患者（以下 SP : Simulated Patient）として参加した経験における気づきを明らかにし、看護基礎教育機関における卒業生支援への示唆を得る。

方法: 研究参加者は、総合病院に勤務している A 校を卒業した新人看護師のうち SP 参加を希望し、研究参加の意思がある者とした。データ収集は、SP としての役割終了後に自記式質問紙調査を行った。また、2 週間後に SP としての経験についてグループでの半構造化面接調査を行った。自記式質問紙調査の数値データは単純集計を行った。質問紙の自由記述と半構造化面接の逐語録から取り出したデータは、質的記述的分析を行った。

結果: 研究参加者は 17 名であった。自記式質問紙調査から「学生と同じ経験をしてきたから学生の気持ちがわかる」など 21 のサブカテゴリ、半構造化面接調査から「学生と比較して自己の成長を確認できた」など 19 のサブカテゴリを抽出した。サブカテゴリ全体を比較検討した結果、SP として教育に参加した経験における気づきとして、【学生の対応に刺激を受け、初心に戻る】など 11 カテゴリが抽出された。母校の教育に SP として参加した新人看護師の経験における気づきは、教育についての気づきに加え、在校生と同じ経験を共有することで初心に戻り、自己の成長への気づきがあった。また業務に追われ看護がおろそかになっている時期に母校に戻り、看護師としての実践をふり振り返り再考することにより得られた気づきがあった。

結論: 新人看護師は母校の教育へ参加した経験を通して、初心に戻り自己の成長に気づいていた。また、SP としての役割を遂行しながら、学生・患者・看護師など立場を多様に変換させ気づきを導いていたことが明らかになった。今後、看護基礎教育機関における卒業生支援のひとつとして、新人看護師の基礎教育への参加の時期や方法を検討しつつ、臨床現場と協働し発展する可能性があるとの示唆を得た。

キーワード: 新人看護師 模擬患者 母校 卒業生支援

Key words: new nurse, simulated patient, alma mater, supporting nursing graduate

1. はじめに

看護基礎教育機関を卒業した学生は、刻々と変化する臨床現場へ看護師としての一步を踏み出す。新人看護師は、学生の頃から臨地実習での経験をおおして、臨床現場の状況について理解した上で入職したにも関わらず、多くの困難と向き合うことになる。看護師としての適応期間における臨床現場での支援はもちろんのこと、看護基礎教育機関においても臨床現場と協働した支援が必要であると考えられる。

2010 年から新人看護職員研修が努力義務化され、臨床現場における継続教育の充実が図られ、新人看護師へ

の支援体制が強化されてきた。その背景として、臨床現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で修得する看護実践能力との間に乖離が生じ、その乖離が新人看護職員の離職の一因であると指摘され（厚生労働省, 2014）、離職防止策の検討は、現在でも継続的な課題となっている（日本看護協会, 2021）。

一方、看護基礎教育機関においては、臨床現場と教育の乖離を最小限にするよう、実践能力を高めるための教育方法が工夫されてきた。学内では、臨床現場により近い状況を設定した体験学習（雄西ら, 2006）、模擬患者を活用した教育方法（渡邊ら, 2011）、事例を活用したロールプレイ（堅田, 2012）などのシミュレーションによる教育などが報告されている。学内での取り組みは、臨地実習へ向けての準備性を高め実習での学習促進へとつながり、学生の卒業時の看護実践能力に影響するもの

1) 沖縄県立看護大学

2) ぐしかわ看護専門学校

3) 元ぐしかわ看護専門学校

と考える。

A 看護専門学校（以下、A 校）は、卒業時における看護実践能力の到達度を評価する目的で、客観的臨床能力試験（以下、OSCE :Objective Structured Clinical Examination）を取り入れ、学生の卒業時までの経験を活かし状況に応じた実践となるよう模擬患者（以下、SP :Simulated Patient）を導入した。導入計画時の A 校はマンパワー不足にあり、SP の担い手として、卒業後の近況報告のため来校する卒業生に協力を依頼した。OSCE 終了後には、卒業生に対して 3 か月後に迫った看護師としての自己の将来を重ねている在校生の反応や、在校生に過去の自己の姿を重ねている卒業生の姿に多く接してきた。教育の対象である在校生だけでなく、実践している教員、さらに参加している卒業生自身に何らかの変化をもたらすきっかけになっているのではないかと手応えを感じた。しかし、卒業生が SP として教育に参加する取り組みに対して、在校生・SP 役の卒業生・教員の三者それぞれがどのように捉えているかについて、実態を把握せず継続していることが課題であった。

SP が教育に参加する方法は、リアルな学習状況を創り出すため、実践的学習を促進する方法として期待されている（大学ら、2005；清水ら、2008；渡邊ら、2011；小西、2013）。本田ら（2009）の文献レビューによると、SP の特徴として「看護教員」の場合、学生のレディネスを理解した教育的フィードバックが受けられ、「看護師」の場合、臨床の実情にあった技術に対する評価が受けられ、「専門機関で訓練を受けた一般市民」の場合、リアリティのある患者を対象とした体験ができるという特徴があると述べている。そのため、このような SP の特徴を理解し、どのような目的を主眼としているかによって活用していく必要があると指摘していた。しかし、卒業生が SP の担い手の場合の特徴については示されていない。また、新人看護師が SP としての役割を担った場合の特徴を明確にした報告は見いだせなかった。

そこで、A 校が取り組んできた新人看護師である卒業生が SP として参加する教育の実態を把握するために、在校生・SP 役の卒業生・教員の三者を対象として調査を実施した。本報告は、実施した調査のうち SP 役の卒業生である新人看護師の経験に焦点をあてた。看護師として実践に責任を持ち始めた時期に、母校の教育に SP として参加した経験における気づきを明らかにすることは、看護基礎教育機関における新人看護師の継続教育へ寄与すると考えられた。

II. 研究目的

新人看護師が母校の教育に SP として参加した経験における気づきを明らかにし、看護基礎教育機関における卒業生支援への示唆を得る。

III. 用語の定義

1. 新人看護師

看護基礎教育機関における教育課程を修了し、免許取得後に初めて就労する入職後 1 年以内の看護師とし、「卒後 1 年目の看護師」も同様である。

2. 卒業生

A 校を前年度に卒業したもので、今回の教育への取り組みに SP として参加した卒業生とする。

3. OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力試験)

卒業前に実施することから看護教育における考え方を基盤に、認知・精神運動・情意領域を含めた総合的な評価を行う OSCE をいう。

4. SP (Simulated Patient : 模擬患者)

卒業生が経験した場面から臨床現場のリアリティを重視した OSCE 課題を抽出し、その状況での現実的な対応を評価することで、教育と臨床現場をつなぐ教育に焦点をあてていくことから、「Simulated Patient」の意味合いの「SP」を用いた。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究である。

研究参加者が SP としての役割終了直後に、質問紙調査を実施した。質問紙を用いた調査回答を補完し詳細なデータを得るためにグループでの半構造化面接を行い、得られたデータを質的記述的に分析した。

2. 研究参加者と募集方法

研究参加者は、総合病院に勤務している A 校を卒業した新人看護師のうち SP 参加を希望し、研究参加の意思がある者とした。研究倫理審査承認後、前年度卒業生に OSCE における SP 協力者を募っていることを伝え、同期の卒業生へ声かけを依頼した。協力を申し出た者に対し、研究の趣旨と役割や倫理的配慮について記した文書を添えて、学内での説明会の案内について手渡しまたはメールを送付した。学内説明会で再度口頭にて研究の趣旨を伝え、文書により同意を得た。

3. A 校における卒業前 OSCE の概要および卒業生の SP としての役割

1) 卒業前 OSCE の概要

(1) OSCE 実施までの準備

臨床現場のリアリティを教育に取り入れる目的で、SP 役の卒業生の看護師としての経験から、OSCE 課題（状況設定）の要素を取り出した。入職直後の時期にうまく対処できず困った体験を出し合った結果、「肺炎で入院し、排便困難がある患者のポータブルトイレからベッドへの移動介助をライン類（点滴、酸素）に配慮しながら行う。さらに、体動後出現した症状の観察とその対応について適切に報告する」という状況設定とした。

設定した OSCE 課題をもとにシナリオ、評価表および

SPと教員用2種類のOSCE実施マニュアルを作成した。作成したシナリオをもとに教員がSP役、学生役、評価者役を演じ、ビデオカメラで録画しモデルテープを作成した。教員間でモデルテープを活用した実施マニュアルの見直しを行った。

SP役の卒業生が勤務する施設長宛に、学校長からの教育への参加に対する協力願いを送付した。

(2) OSCE 実施当日

実施時の流れや設営したOSCE会場の状況などについては、学生ガイダンス資料をもとに事前に学生へ周知した。学生は受験前にOSCE課題(状況設定)を確認し、6つの会場に分かれ受験した。各受験会場を2名の教員と1名のSPで担当した。

(3) OSCE 実施後

OSCE実施直後に、学生は、教員とSPの3者で実践をふり振り返り、受験会場を退室後に個人でリフレクションシートをまとめ、翌日のグループリフレクションに参加した。卒業直前のOSCEであることから、グループリフレクションは客観的な看護実践の振り返りを深め自己の課題を明確にし、看護師としての近い将来を考えることを目的とした。

2) 卒業生のSPとしての役割

(1) OSCE実施までのSPとしての準備

①状況設定の素材提供

看護師として入職直後うまく対処できず困った体験から、状況設定の素材を提供した。

②SPの演技の統一

SPとしての役割遂行へ向けて、練習期間を設け演技の統一を図った。

③OSCEリハーサル

教員およびSP役の卒業生で、SP用マニュアルの確認やモデルテープの視聴後に、実際のOSCEを想定したリハーサルを実施し、OSCE当日のSPとしての役割を確認した。

(2) OSCE実施当日

①SPとしての役割の遂行

3回程度のSP役を担ったあとはSP控室で待機し、ローテーションで担当した。SP控室内の卒業生は、SPとしての情報共有に加え、自己の学生時代のOSCEとの比較、職場での新人看護師としての葛藤や経験などについて意見交換を行っていた。

②SPの立場からのフィードバック

OSCE実施後の受験会場内でのリフレクション時に実施した。

4. データ収集期間

20〇〇年1月～2月の期間に、OSCE実施直後の自記式質問紙調査とOSCE実施から2週間後に、2グループに分けて半構造化面接を行った。

5. データ収集方法

1) 自記式質問紙調査

1期先輩の卒業生がSPとして参加した教育についての自記式質問紙調査は、SPとしての役割終了後、SP控室の所定の場所から調査票を受け取り、記入後に鍵付き回収箱に投函するよう依頼した。

調査項目は4項目で、1. 1期先輩の卒業生がSPとして教育に参加することの効果についてどのように考えているか、2. 卒業生がSPとして参加する教育は継続した方が良いか、3. SPとしての経験は今後の実践に役立つか、4. 卒業生が参加する教育について感じたこと・考えたことである。調査項目2と3については、問いの性質上4段階評価とし、選択理由について自由記述を求めた。

2) 半構造化面接調査

SPとしての役割を遂行し2週間程度経過した後にグループでの半構造化面接を実施した。研究者がファシリテーターとなり、共同研究者1～2名の同席のもと90分の面接を実施した。1グループ5～6名のSP役の卒業生で編成した。面接内容として、①SPとしての経験は実践に役立っているか、②SPとしての経験からの気づきについて自由に話すよう促した。面接内容は、全員の同意を得てICレコーダを用いて録音し、逐語録を作成した。

6. データ分析方法

1) 自記式質問紙調査

(1) 4段階評価に関しては、調査項目毎に単純集計を行った。

(2) 自由記述に関しては、調査項目毎に異なる記述内容毎に書き分け、それぞれを素データとしID番号を付した。次に、素データの類似性に従い類別しコードとした。コード化の際は、素データの意味内容が伝わるよう可能な限り素データの中のキーワードを用い、体言止めを避けて表現した。さらに、意味内容が類似しているコードからサブカテゴリを抽出した。

2) 半構造化面接調査

2グループで実施した半構造化面接調査で得られたデータは、逐語録を作成し、共同研究者と繰り返し熟読し、発言者がSPとしての経験でどのような気づきがあったかという視点で素データを取り出した。さらに、質問紙調査の自由記述と同様の手続きでコード化し、サブカテゴリを抽出した。

3) 『SPとして母校の教育に参加した経験における気づき』の抽出

質問紙調査の自由記述および逐語録から抽出したサブカテゴリ全体を比較検討してカテゴリ化し、『SPとして母校の教育に参加した経験における気づき』を抽出した。なお、データの分析にあたっては、共同研究者と合意が得られるまで繰り返し検討し、研究指導者のスーパービジョンを受け、最も妥当と判断したものを選択した。

7. 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属していたA校の卒業生を対象としたことで、教員という関係性からの強制力が働かな

いよう、研究協力依頼は研究者の立場からのものであること、意思に反した協力を望んでいないことを強調した。

質問紙調査票は無記名とし、面接時の録音等に関しては参加者の了解を得て行い、逐語録の作成に際しては、氏名、施設名、卒業生の所属機関を特定し得る情報は記号化して扱い匿名性を担保した。また、収集したデータに関しては機密の保持に努めた。さらに、公表後10年間は鍵付きの棚で厳重に保管し、その後消去することとした。

本研究は、沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会による承認を得て実施した。(承認番号: 14011)

V. 結果

1. 研究参加者の概要

OSCE実施時、SPとしての役割を担う卒業1年目の卒業生17名であった。卒業生は、総合病院に看護師として就職して10ヶ月後にSPとして教育に参加した。

OSCE実施後の卒業生グループ面接調査は、勤務の状況を考慮し、2グループに分けて実施日を設定したが、勤務調整が困難な卒業生もいて参加者は1グループ目5名、2グループ目6名で17名中11名(参加率65%)であった。

2. 自記式質問紙調査結果

1期先輩の卒業生がSPとして参加した教育についての質問紙調査において、4つの調査項目全体で71の素データを取り出した。素データを類別した結果、33のコードを抽出した。さらに、21のサブカテゴリへと抽象化した結果を示す(表1)。調査項目ごとに得られた結果および調査項目2と3については、4段階評価の結果について示す。

1) 1期先輩の卒業生がSPとして教育に参加することの効果について

「学生と同じ経験をしてきたから学生の気持ちがわかる」
 「臨床を経験しているので、臨床現場の様子を伝えることができる」
 「学生の一生懸命な姿にふれ、初心に戻った」の3つのサブカテゴリが抽出された。

2) 卒業生がSPとして参加する教育の継続の必要性について

「とてもそう思う」から「全く思わない」の4段階評価を用いて聞いた。「とてもそう思う」11名(64.7%)、「そう思う」6名(35.3%)、「あまり思わない」「全く思わない」は、0であった。参加者全員が「とてもそう思う」「そう思う」を選択し、肯定的に受け止めていた。

理由として、「経験者なので、学生の気持ちがわかる」
 「卒業生のアドバイスは、臨床をイメージしやすい」
 「学生時代、先輩の姿に1年後の自己を映し出していた」
 「学生から刺激を受け、初心に戻る」
 「学生から学ぶことができる」
 「卒業後も学校とのつながりができる」
 「卒業生、在校生両者にとって良い影響がある」
 「可能ならば参加した方がよい」
 「自己の経験から印象

深い教育方法であった」の9つのサブカテゴリが抽出された。コードと同名のサブカテゴリについては、意味内容を繰り返し検討し、サブカテゴリ全体を比較検討した上で同名とした。

3) SPとしての経験は今後の実践に役立つかについて

「とても役立つ」から「全く役立つしない」の4段階評価を用いて聞いた。「とても役立つ」12名(70.6%)、「役立つ」5名(29.4%)、「あまり役立つしない」「全く役立つしない」は、0であった。参加者全員が「とても役立つ」「役立つ」を選択し、肯定的に受け止めていた。

理由として、「SPとしての経験は、看護師としての新たな学びや発見に繋がっている」
 「学生の姿を見て初心に戻り、看護の原点を再確認できる」
 「自己の日常での看護としての対応を想起し、客観視する機会になった」の3つのサブカテゴリが抽出された。

4) 卒業生が参加する教育について感じたこと・考えたことについて

「卒業生、在校生両者にとって良い影響がある」
 「参加することで卒業生自身の学びの機会となる」
 「臨床を経験しているので、臨床現場の様子を伝えることができる」
 「学生の対応に実習の成果を感じ、自分たちも同じ体験をしてきたと実感した」
 「卒業生間の意見交換の場となる」
 「伝統をつくる」の6つのサブカテゴリが抽出された。

調査項目1と4における自由記述の項目と調査項目2と3における4段階評価の選択理由において、初心にかえるや臨床の様子を伝えることができるなど重複するコードが複数あった。

3. 半構造化面接調査結果

OSCE終了後のグループ面接調査の逐語録から、SPとしての経験でどのような気づきがあったかという視点で87の素データを取り出し、質問紙調査の分析方法と同様の手続きで分析を進め、27のコードを抽出した。さらに、19のサブカテゴリへと抽象化した結果を示す(表2)。

「今の時期にSPを経験できて良かった」
 「業務に追われながらもこなさないといけない時期にSPを経験しているから気づけた」
 「学生の一生懸命に接する姿をみて感動した」
 「患者の立場にたって看護することの大切さを再認識した」
 「SPの経験を通して、自己の現在の看護実践を考える機会となった」などを含む19のサブカテゴリが抽出された。

4. 『SPとして母校の教育に参加した経験における気づき』の抽出

質問紙調査の自由記述から抽出した21のサブカテゴリと、グループ面接調査の逐語録から抽出した19のサブカテゴリ全体を比較検討し、『SPとして母校の教育に参加した経験における気づき』として11のカテゴリを抽出した。これら11のカテゴリは、その内容から「卒業生自身について」「SPとして参加した教育について」「在校生について」「関係者同士のつながり」「その他」

表1 1期先輩の卒業生がSPとして参加した教育

| 調査項目 | サブカテゴリ | コード |
|--------------------------------|---|--|
| 1. 1期先輩の卒業生がSPとして参加することの効果について | 学生と同じ経験をしてきたから学生の気持ちがわかる (A1-①) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生の考えていることが分かる ・学生の緊張が和らぐ ・学生の立場も踏まえ教員と違う視点を持っている ・学生に近い体験をしている |
| | 臨床を経験しているのので、臨床現場の様子を伝えることができる (A1-②) | <ul style="list-style-type: none"> ・臨床の様子を伝えることができる ・先輩の臨床経験から出たアドバイスは今後活かせる ・先輩の参加は緊張感がある ・臨場感を感じる ・学生の自信につながる |
| | 学生の一生懸命な姿にふれ、初心に戻った (A1-③) | <ul style="list-style-type: none"> ・初心に戻る ・学生の一生懸命な対応に刺激を受ける |
| 2. 卒業生がSPとして参加する教育は継続した方が良いか | 経験者なので学生の気持ちがわかる (A2-①) | <ul style="list-style-type: none"> ・経験者なので学生の気持ちがわかる |
| | 卒業生のアドバイスは、臨床をイメージしやすい (A2-②) | <ul style="list-style-type: none"> ・先輩からのアドバイスは良い ・臨床現場を意識することができる |
| | 学生時代、先輩の姿に1年後の自己を映し出していた (A2-③) | <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが学生の頃、1年後の看護師としての姿を先輩に映し出していた |
| | 学生からの刺激を受け、初心に戻れる (A2-④) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生からの刺激を受け、初心に戻れる |
| | 学生から学ぶことができる (A2-⑤) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生から学ぶことができる |
| | 卒業後も学校とのつながりができる (A2-⑥) | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後も学校とのつながりができる |
| | 卒業生、在校生両者にとって良い影響がある (A2-⑦) | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生、在校生両者にとって良い影響がある |
| | 可能ならば参加した方が良い (A2-⑧) | <ul style="list-style-type: none"> ・可能ならば参加した方がいい |
| | 自己の経験から印象深い教育方法であった (A2-⑨) | <ul style="list-style-type: none"> ・自己の経験から印象深い教育方法であった |
| 3. SPとしての経験が今後の実践に役立つか | SPとしての経験は、看護師としての新たな学びや発見に繋がっている (A3-①) | <ul style="list-style-type: none"> ・SPの役割を通して、患者の安楽や安全について体験できた ・SPとして経験し学んだことを今後活かす |
| | 学生の姿を見て初心に戻り、看護の原点を再確認できる (A3-②) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生の対応に刺激を受ける ・学生時代の自己に戻り、看護の原点を再確認している ・初心に戻れる |
| | 自己の日常での看護師としての対応を想起し、客観視する機会になった (A3-③) | <ul style="list-style-type: none"> ・自己の日常での看護師としての対応を思い出し、振り返る |
| 4. 卒業生が参加すること考えたこと | 卒業生、在校生両者にとって良い影響がある (A4-①) | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生、在校生両者にとって良い影響がある |
| | 参加することで卒業生自身の学びの機会となる (A4-②) | <ul style="list-style-type: none"> ・参加することで自分自身の学びになる |
| | 臨床を経験しているのので、臨床現場の様子を伝えることができる (A4-③) | <ul style="list-style-type: none"> ・臨床を経験しているのので、臨床現場の様子を伝えることができる |
| | 学生の対応に実習の成果を感じ、自分たちも同じ体験をしてきたと実感した (A4-④) | <ul style="list-style-type: none"> ・学生の対応から、自分たちも良い実習をしてきたと実感した |
| | 卒業生間の意見交換の場となる (A4-⑤) | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生間の意見交換の場となる |
| | 伝統をつくる (A4-⑥) | <ul style="list-style-type: none"> ・伝統をつくる |

※Aはアンケート調査を示し、次に続く数字は調査項目番号を示す。

表 2 SP としての経験における気づき

| サブカテゴリ | コード |
|--|--|
| 今の時期に SP を経験できて良かった (B-①) | ・今の時期に SP を経験するのが良い |
| 業務に追われながらもこなさないといけない時期に SP を体験しているから気づけた (B-②) | ・業務に追われながらもこなさないといけない時期 |
| 学生の一生懸命で丁寧に接する姿を見て感動した (B-③) | ・学生の一生懸命で丁寧に接する姿を見て感動した ・今の自分よりもできていて学生はすごいなあと思った |
| 患者の立場にたって看護することの大切さを再認識した (B-④) | ・SP 体験後、患者を敬う心はブレずに持ち続けようと思った ・患者の立場にたって看護しようとする大切さを改めて気づいた |
| SP 体験を通して、自己の現在の看護実践を考える機会になった (B-⑤) | ・SP 体験を通して、今まであまり意識せずにしていたことが、患者さんにとって苦痛や不安な気持ちになることがわかった ・SP 役を通して、自己の実践を振り返り考える機会になった |
| OSCE の状況設定は現場の状況がイメージできる形であった (B-⑥) | ・OSCE の状況設定は現場の状況がイメージできる形であった ・今でも（現場にいても）報告したあと、何を観察すればいいのか難しい ・自分達の時の OSCE より、報告・アセスメントが重視されていて、実践という感じで良かった ・自分たちが学生の時の実習では、報告したあと、どうなるかイメージがわかなかった |
| 卒業生はシナリオ通り SP を演じていた (B-⑦) | ・卒業生はシナリオ通り SP を演じていた |
| 卒業生は、学生の反応をみながら、SP を演じていた (B-⑧) | ・卒業生は、学生の反応から自分の SP としての演技を振り返っている |
| 学生は 1 年目の卒業生を身近に感じているので、アドバイスを伝わりやすい (B-⑨) | ・学生は身近に感じる ・卒後 1 年目の卒業生のアドバイスは、学生の心に響く |
| 自分達にも気づきが多く効果がある (B-⑩) | ・気づきが多く、自分達の方にも効果がある ・学生にアドバイスしながら自分にも言い聞かせていた |
| 学生と比較して自己の成長を確認できた (B-⑪) | ・学生と比較して自分達も成長したと感じた |
| 1 年目であっても学生には看護師として映る (B-⑫) | ・1 年目であっても臨床経験のある看護師なので緊張感がある |
| 臨床では、どのような状況であっても看護師として求められる (B-⑬) | ・実力が発揮できない中でも、やらなければならないという点では、学生と僕らも一緒だと思う |
| 教員が SP だと学生は試験という感じで患者として捉えられない気がする (B-⑭) | ・教員が SP だと学生は試験という感じで患者として捉えられない気がする |
| 3 年目の看護師が SP だと、指導的な立場になりそう (B-⑮) | ・3 年目の看護師だと、指導的な立場になりそう |
| 卒業前だけでなく、他の学年や演習・実習でも取り入れていけると良い (B-⑯) | ・卒業前だけでなく、他の学年や演習・実習でも取り入れていけると良い |
| 学校からの SP としての依頼は、看護師という自覚が芽生え勉強になる (B-⑰) | ・SP としての依頼は、看護師という自覚が芽生え、勉強になる |
| 学校の依頼に対して参加しやすいよう職場が配慮した (B-⑱) | ・SP として参加しやすいように学校が職場と調整してくれた |
| 後輩や母校のために協力していきたい (B-⑲) | ・後輩や母校のためにできることがあれば喜んで手伝いたい |

※B は半構造化面接調査を示す。

表3 SPとして母校の教育に参加した経験における気づき

| 分類 | カテゴリ | サブカテゴリ |
|-----------------|-----------------------------------|---|
| 卒業生自身について | 学生の対応に刺激を受け、初心に戻る | <ul style="list-style-type: none"> ・学生の一生懸命な姿にふれ、初心に戻った (A1-③) ・学生から刺激を受け、初心に戻る (A2-④) ・学生の姿をみて初心に戻り、看護の原点を再確認できる (A3-②) ・学生の一生懸命で丁寧に接する姿を見て感動した (B-③) |
| | 卒業生も学びを深め、自己の成長を確認できる | <ul style="list-style-type: none"> ・学生から学ぶことができた (A2-⑤) ・参加することで卒業生自身の学びの機会となる (A4-②) ・自分たちにも気づきが多く効果がある (B-⑩) ・学生と比較して自己の成長を確認できた (B-⑪) |
| | SPの経験は看護師としての振り返りを促し、看護を再考する機会となる | <ul style="list-style-type: none"> ・SPとしての経験は、看護師としての新たな学びや発見につながっている (A3-①) ・自己の日常での看護師としての対応を想起し、客観視する機会となった (A3-③) ・患者の立場にたって看護することの大切さを再確認した (B-④) ・SP経験を通して、自己の現在の看護実践を考える機会になった (B-⑤) ・学校からのSPとしての依頼は、看護師という自覚が芽生え勉強になる (B-⑰) |
| | 業務に追われている卒業後1年目のSP経験だから気づけた | <ul style="list-style-type: none"> ・今の時期にSPを経験できて良かった (B-①) ・業務に追われながらもこなきないといけない時期にSPを体験しているから気づけた (B-②) ・臨床では、どのような状況であっても看護師として求められる (B-⑬) |
| SPとして参加した教育について | 状況設定や卒業生のアドバイスは臨床をイメージできる | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生のアドバイスは、臨床をイメージしやすい (A2-②) ・臨床を経験しているので、臨床現場の様子を伝えることができる (A1-②、A4-③) ・OSCEの状況設定は現場の状況がイメージできる形であった (B-⑥) ・学生は1年目の卒業生を身近に感じているので、アドバイスが伝わりやすい (B-⑨) |
| | SPとしての役割遂行はできた | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生はシナリオ通りにSPを演じていた (B-⑦) ・卒業生は学生の反応をみながらSPを演じていた (B-⑧) |
| | SPの背景によって、学生の思考や行動が変化する | <ul style="list-style-type: none"> ・教員がSPだと学生は試験という感じで患者として捉えられない気がする (B-⑭) ・3年目の看護師がSPだと、指導的な立場になりそう (B-⑮) |
| 在校生について | 先輩の姿から看護師像を描く | <ul style="list-style-type: none"> ・学生時代、先輩の姿に1年後の自己を映し出していた (A2-③) ・1年目であっても学生には看護師として映る (B-⑱) |
| | 学生と同じ経験をしているので気持ちがわかる | <ul style="list-style-type: none"> ・学生と同じ経験をしてきたから学生の気持ちがわかる (A1-①) ・経験者なので学生の気持ちがわかる (A2-①) |
| 関係者同士のつながり | 先輩、後輩、同級生、学校、職場がつながる機会となる | <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生、在校生両者にとって良い影響がある (A2-⑦、A4-①) ・卒業後も学校とのつながりができる (A2-⑥) ・可能ならば、参加した方がよい (A2-⑧) ・学生の対応に実習の成果を感じ、自分たちも同じ体験してきたと実感した (A4-④) ・卒業生間の意見交換の場となる (A4-⑤) ・伝統をつくる (A4-⑥) ・学校の依頼に対して参加しやすいよう職場が配慮した (B-⑱) ・後輩や母校のために協力していきたい (B-⑲) |
| その他 | その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・自己の経験から印象深い教育方法であった (A2-⑨) ・卒業前だけでなく、他の学年や演習・実習でも取り入れていけるとよい (B-⑯) |

に分けられた(表3)。ここでは、カテゴリは【 】、サブカテゴリは《 》、素データはゴシックを用いて示し、文のつながりをつけるためにサブカテゴリの表現を一部省略し…で示した。各分類とカテゴリにそって、母校の教育にSPとして参加した新人看護師の経験における気づきについて説明する。

1) 卒業生自身について

卒業生自身については、4つのカテゴリが含まれた。

【学生の対応に刺激を受け、初心に戻る】については、こんな実習してきたんだなあって思うくらい丁寧に接してくれて感動した。学生が一生懸命だったから泣きそうになったなど《学生の一生懸命で丁寧に接する姿を見て感動》し、基本に戻り…、自分も見習おう。気持ちを入れ替えて、また現場で頑張っていこうと《学生の姿をみて初心に戻り、看護の原点を再確認…》していた。

【卒業生も学びを深め、自己の成長を確認できる】に

については、「自分たちにも気づきが多く効果がある」と捉え、自分自身も患者さん側にたつて看護のあり方を考えさせられたと「学生から学ぶことができ…」さらに「参加することで卒業生自身の学びの機会となる」とした。また、自分達もちょっとは成長できたかなと「学生と比較して自己の成長…」への気づきがあった。

【SPの経験は看護師としての振り返りを促し、看護を再考する機会となる】については、業務に追われ、患者さんとの関わりをおろそかにしている自分がある。それを改めて気づかされた。基本的な部分は当たり前のように意識がうすれていた気がした。など「自己の日常での看護師としての対応を想起し、客観視する機会…」となっていた。SPとしての経験は、親切な声かけも新人最初のころは、やってたはずなのに今はもうなんか…慣れたらいけないんでしょけど…と「患者の立場にたつて看護することの大切さを再確認」しながら、患者がどんな対応をされると良いかを感じ、「…看護師としての新たな学びや発見…」をしていた。それは、卒業生にとって「…自己の現在の看護実践を考える機会…」となり、「…看護師という自覚…」の機会となっていた。

【業務に追われている卒業1年目のSP経験だから気づけた】については、「今の時期にSPを経験できて良かった」と語り、「臨床では、どのような状況であっても看護師として求められる」ので、1年目であってもスピードも求められるし、こなさないといけないこともいっぱいある。時間配分もうまくないから業務優先になっている。1年目のわからない、業務をやることだけにいっぱいになっていって「今の時期」について語っていた。今の時期だからこそ患者さんからしたら一生懸命やってくれることが嬉しいし、教えられた。現場でも焦っているけど、落ち着くように…と「業務に追われながらもこなさないといけない時期にSPを体験しているから気づけた」と語っていた。

2) SPとして参加した教育について

SPとして参加した教育については、3つのカテゴリが含まれた。【状況設定や卒業生のアドバイスは臨床をイメージできる】については、今回のOSCE状況設定は卒業生自身が経験した臨床での困難な場面からシナリオを作成したため、「…現場の状況がイメージできる形であった」。そのことを踏まえて「…臨床現場の様子を伝えること…」や、1年前の自己の経験から、「学生は1年目の卒業生を身近に感じているので、アドバイスが伝わりやすい」と語っていた。

【SPとしての役割遂行はできた】については、演技を統一する時間を確保しディスカッションするだけでなく、設定シナリオを貫っていたので目を通せたと当日も確認作業を行っていた。また、(教員は)大丈夫って言ってましたと自己の演技をOSCE実施時に客観的に評価して貰っていて、「卒業生はシナリオ通りにSPを演じていた」と自己評価していた。また、自分もあの時(昨年のOSCE時)一生懸命だったから気づいてないんだろなあとスー

ハー(呼吸状態を表現)させたんですよ。(学生は)練習10やっても3も出ないくらい緊張する、気づいて貰えるヒントみたいなのがあってもいい。現場とかで、ハーハーしている人がいたら、何かおかしいなとかあるからなど「卒業生は学生の反応をみながらSPを演じていた」。

【SPの背景によって、学生の思考や行動が変化する】については、3年目くらいになったら教員と同じ立場についていか…やテストという枠の中でみてしまうような…など「3年目の看護師がSPだと、指導的な立場になりそう」と卒業1年目の看護師という自己の立場からみた3年目の看護師のとらえ方と重ねていた。また、教員がSPだと冷や汗しかでない…患者としてみれない。や完全に試験としか思えないなど、「教員がSPだと学生は試験という感じで患者として捉えられない気がする」と学生の立場で語っていた。

3) 在校生について

在校生について、2つのカテゴリが含まれた。【先輩の姿から看護師像を描く】については、1つ上の先輩からアドバイスをもらうことで、自分たちも1年後には看護師になってこういう視点をもつことができるんだと思えた「学生時代、先輩の姿に1年後の自己を映し出していた」と学生時代を想起していた。さらに、1年目だけど学生からしてみたら看護師が患者役になっているってことは、程よいつていうかどうかは分からないけど緊張感はあって…「1年目であっても学生には看護師として映る」と語っていた。

【学生と同じ経験をしているので気持ちがわかる】については、卒業生は1年前にOSCEを受験しているため、自分達も経験したことなので、気持ちが共感できる。気持ちが痛いほどわかる。などの記述があり、「学生と同じ経験をしてきたから学生の気持ちがわかる」と捉えていた。

4) 関係者同士のつながりについて

関係者同士のつながりは、【先輩、後輩、同級生、学校、職場がつながる機会となる】ひとつのカテゴリで、「卒業生、在校生両者にとって良い影響がある」「学生の対応に実習の成果を感じ、自分たちも同じ体験してきたと実感した」など、同じ学校で同じ教育を受けてきた先輩として「後輩や母校のために協力していきたい」「伝統をつくる」という思いが読み取れた。また、SPとして準備のため母校へ足を運ぶ機会を複数回設定したことやOSCE当日のSP控室は、異なる施設で頑張っている同級生と再会する機会となり「卒業生間の意見交換の場…」となっていた。

SPを担当した卒業生の多くが実習施設で勤務しており、研究参加者として同意を得た後、勤務先の施設長宛に学校側からの協力を文書にて依頼したことで、「学校の依頼に対して参加しやすいよう職場が配慮した」となった。

5) その他

どのカテゴリにも属さないサブカテゴリを【その他】とし、サブカテゴリの「自己の経験から印象深い教育方

法であった》は質問紙調査の自由記述から、《卒業前だけでなく、他の学年や演習・実習でも取り入れていけると良い》はグループ面接調査の逐語録から抽出した。

結果として、母校の教育にSPとして参加した新人看護師の経験における気づきは、教育についての気づきに加え、在校生と同じ経験を共有することで初心に戻り、自己の成長への気づきがあった。また業務に追われている時期に母校に戻り、看護師としての実践をふり返り再考することにより得られた気づきがあった。

VI. 考察

1. 母校の教育にSPとして参加した新人看護師の経験における気づき

新人看護師である卒業生は、SPとしての役割を遂行しながら、学生・患者・看護師など立場を多様に変換させ、経験における気づきを導いていたことが明らかになった。

在校生の姿を見て【学生の対応に刺激を受け、初心に戻る】自分がいることに気づき、【SPの経験は看護師としての振り返りを促し、看護を再考する機会となる】ことに気づいていた。武村(2011)は、新人看護師としての時期を「基礎教育で学んだルールは破棄されたわけではなく、新しい価値観や行動規範を学ぶことに集中し、過去に学んだルールの影響力が極端に弱まっている状態」と表している。卒業生は、看護師として実践に責任を持ち始めた段階の卒後10ヶ月という「業務をこなさなければならない」時期に、母校の教育に参加した。看護学生として学んだ基本と異なる状況に遭遇した場合、葛藤を感じつつも処理しながら日々の業務と向き合う機会が多いことが推測できる。【業務に追われている卒後1年目のSP経験だから気づけた】ことで、在校生の姿を通して日常の葛藤と向き合い、初心を思い出すことで気持ちを整理する機会となったと考える。

また、大野ら(2014)は、大学が主催する卒後1・2年目の合同研修の報告の中で、合同研修における利点として、「1年目にとっては先輩と接することで、自分の1年後の姿を予測できる。2年目にとっては後輩と接することで、1年前の自分を振り返り、自分の成長を実感することができる」と述べている。置かれている状況は異なるが、1年の違いによる特徴は類似している。臨床では先輩から毎日のように叱咤激励されている新人看護師であるが、「学ぶ側」から、「教える側」へと立場の変換を行うことで、普段の自分とは異なった視点から自分自身に気づく機会となっていた。教えられた先輩が後輩を教えていくという「屋根瓦式教育」は、教える側の理解を高めるとともに、教わる側の学習モチベーションを高める方法として効果的と言われている(梅井ら, 2013)。今回の新人看護師として教育に参加した経験において、【卒業生も学びを深め、自己の成長を確認できる】ことに気づき、卒業生にとって困難を乗り越えるエネルギー

となったと言える。

2. 看護基礎教育と臨床現場をつなぐ新人看護師

新人看護師である卒業生は、在校生と最も身近な存在として看護基礎教育に参加した結果、SPの役割を通して臨床現場の臨場感を教育の場に生み出し、看護基礎教育と臨床現場をつなぐ役割も果たしていた。臨床現場と看護基礎教育の乖離という課題解決へ向けて、卒業生はOSCEでSPを演じるだけでなく、卒後うまく対処できず困った場面のディスカッションへも協力した。ディスカッションを踏まえ、教員は、在校生が卒後遭遇する可能性の高いものを選択しシナリオを作成したことで、【状況設定や卒業生のアドバイスは臨床をイメージできる】という気づきにつながったと考える。OSCEの状況設定は、新人看護師のリアリティショックをもたらす状況を取り上げた先行研究(勝原ら, 2005; 佐居ら, 2007; 糸嶺, 2013)で示された、「緊急時のタイムリーな対応」や「コミュニケーションの困難さ」を含んでおり、卒業前の状況設定としては適切だった。

また、卒業生は、在校生の置かれているストレスフルな状況が理解できるので、在校生に安心感を与えていた反面、【SPとしての役割遂行はできた】や【SPの背景によって、学生の思考や行動が変化する】など評価に影響を与える可能性も含んでいた。たとえば、学生の対応を見て、SPの症状に気付くよう演技を強調する(表2.B-⑧)などである。【学生と同じ経験をしているので気持ちがわかる】ため、SPの配慮によって公平な演技にならないのではとの見方があり、卒業生は、在校生にとって良かれと思い行ったとしても、教育に重要な評価の公平性や成長を促すフィードバックを損なう恐れがある。そこで、卒業生のSPとしての参加がより効果的になるよう、教育に参加する卒業生とともに当該教育活動の目標を共有し、SP役割に関する確認作業を具体的に行っていく必要がある。SPが身近な存在であることから、試験情報のもれの可能性が考えられたが、これについても同様の対応が必要である。山海ら(2010)は、看護学生の調査結果から、OSCE実施時の緊張の要因について、自分の技術が未熟であるとする「自分自身に関する要因」や、評価者やSPに対する思いなどの「他者に関連する要因」、臨床とは違う不自然な環境、初めて見る機材などの「環境に関連する要因」の3つをあげている。その中の「他者に関連する要因」において、「SPが知っている人だとホッとすが、うまくできない時は嫌になる」「知らない人のほうがリアリティがある」など、SPと受験者の関係によって生じる思いがOSCE実施時の緊張の要因となることを指摘していた。そのため、卒後1年目の卒業生を教育に活用する場合、教育の受け手である在校生と参加した卒業生との関係性によって生じるマイナスの影響を最小限にする努力を進めながら、プラスの影響をさらに伸ばすための工夫が求められる。

臨床に目を向け看護師としての歩みを目前にした在校

生は【先輩の姿から看護師像を描き】、SPを担った卒業生と設定された状況下で看護を体験することで、相互に刺激を受け心が動かされていた。ここから、卒後1年目の卒業生が母校の教育に参加する場合、「教育の対象」や「開講時期」は重要な意味を持つと考える。卒後1年目の卒業生の置かれている現状を知り、基礎教育の中に取り込むことで、在校生のもつ現場のイメージを強化できる。実習とは異なる場面で卒業生が生み出した教育であると言える。この教育を通して、専門職として臨床現場へ向かう学生と専門職として歩み始めた新人看護師がつながり、シームレスな臨床現場への移行への一助となることが期待できる。

3 新人看護師に対する看護基礎教育機関における卒業生支援への示唆

新人看護師である卒業生が母校の教育に参加することによって【先輩、後輩、同級生、学校、職場がつながる】ことは、看護基礎教育機関における卒業生支援のひとつとして期待できると考える。SP控室は、SPやOSCEに関連する内容に加え、卒後さまざまな施設で新人看護師として勤務する仲間が一堂に会して臨床での経験を語り合う卒業生間の意見交換の場となり、同級生同士のつながりを強める機会にもなっていた。異なる施設でキャリア初期の段階を経験し、その経験や今の気づきを母校へ足をはこぶ機会をつくり共有することで、さらなる専門職としての成長が促進されるのではないかと考える。金井(1989)は、ピア・ディスカッションにおいて、同じことに悩んでいる、あるいは同じ問題にそれとなく気づきつつある同輩と同じ場で疑問提示することの重要性を述べており、母校の教育への参加を目的に集まったピアの存在は、看護師としての社会化の促進にも影響していると考えられる。

立場を変換させながら自分自身での新たな学びや気づきは、これからの看護師としての歩みを支えるものとなり、キャリア初期における看護師としての成長に影響を及ぼす一因となったと言える。唐澤ら(2008)は、新人看護師を対象とした「職務上の困難と欲しい支援」の調査で、「誰からどのような支援が欲しいか」について報告している。支援者として、「看護管理者」「先輩看護師」「同期の看護師」「教育機関」を取りあげ、「同期の看護師」からは、「悩みを共有したり、お互い得た体験を共有したり、一緒にゆっくり話す時間をもったり、仕事上の愚痴を聞いたり話したりする時間がもてること」を支援として求めている。また「教育機関」については、「いつでも駆け込める場であり卒後も繋がりを感じられることを求めている、自分を良く知っている人に卒業後も継続して関わって貰えることが新人看護師の精神的安定をもたらす」と述べている。今回、SPとして参加した卒業生が、体験を通して成長したことを実感していることから、新人看護師にとって母校が、精神的拠り所に加え、教育に参加することで看護師としての成長を促進する役

割を果たし得ることが示唆された。

看護基礎教育機関における卒業生支援として、ホームカミングデーや在校生と卒業生の交流会、卒業年度ごとの研修会など(吉村ら, 2010; 松浦ら, 2014; 岩村ら, 2017; 田辺ら, 2019)が報告されているが、今後は、臨床現場との協働が重要であると考えられる。今回の新人看護師が看護基礎教育に参加する取り組みについて、教育機関の強みを活かしつつ、臨床現場と協働しながら検討することで、新たな卒業生支援として発展する可能性があると考えられる。

VII. 研究の限界および課題

本研究の限界は、研究フィールドのA校には、卒業生が頻りに母校を訪問するという雰囲気があり、それが校風となっていることから、対象が限定された研究結果はその影響を受けていることが考えられる。

今後、本研究で得られた結果の検証に向けて、異なる教育機関での試みや新人看護師の教育へ参加する時期などによって変化が生じるかという視点から卒業生支援のあり方について継続して検討していきたい。

VIII. 結論

新人看護師のSPとして教育に参加した経験における気づきは、教育に対する気づきに加え、在校生や卒業生と同じ経験を共有することで初心に戻り、自己の成長への気づきがあった。また業務に追われている時期に母校に戻り、現在の看護師としての実践をふり振り返り再考することで得られた気づきがあった。つまり、新人看護師である卒業生は、SPとしての役割を遂行しながら、立場を多様に変換させ、経験における気づきを導いていたことが明らかになった。

また、新人看護師である卒業生は、在校生と最も身近な存在として看護基礎教育に参加した結果、SPの役割を通して臨床現場の臨場感を教育の場に生み出し、看護基礎教育と臨床現場をつなぐ役割も果たしていた。よって、看護基礎教育に参加した新人看護師の経験は、教育の受け手である在校生へも影響を与え、学生から看護師へスムーズな移行過程への貢献が期待できる。

今後、看護基礎教育機関における卒業生支援のひとつとして、新人看護師の教育への参加の時期や方法を検討しつつ、臨床現場と協働し発展する可能性があるとの示唆を得た。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました研究参加者の皆様、A校の方々へ深謝いたします。また、本研究をまとめるにあたり、ご指導・ご助言を賜りまして心より感謝申し上げます。沖縄県立看護大学の嘉手苺英子教授に心より感謝申し上げます。

本論文は沖縄県立看護大学大学院保健看護学研究所の修

士論文の一部を加筆・修正したものである。また、本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 大学和子, 西久保秀子, 土蔵愛子. (2005). 基礎看護学における客観的臨床能力試験 (OSCE) の実践—ボランティアによる模擬患者と現任看護師による標準模擬患者との評価から—. 聖母大学紀要 2. 27-34
- 本田多美枝, 上村朋子. (2009). 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察—教育の特徴および効果、課題に着目して—. 日本赤十字九州国際看護大学紀要 7. 67-77
- 糸嶺一郎. (2013). 新卒看護師のリアリティショックに関する研究の動向と課題—過去20年の文献から—. 茨城県立医療大学紀要 18. 1-13
- 岩村龍子, 大川眞智子. (2017). 大学と就業施設の協働による学士課程卒業生への看護生涯学習支援のあり方. 岐阜県立看護大学紀要. 75-84
- 金井壽宏. (1989). ピア・ディスカッションを通じての「気づき」の共有. 組織科学, 23 (2). pp80-90.
- 唐澤由美子, 中村恵, 原田慶子他. (2008). 就職後1ヶ月と3ヶ月に新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援. 長野県看護大学紀要 10. 79-87
- 堅田智香子, 彦聖美, 村井嘉子他. (2012). 看護基礎教育における教育方法の検討—シナリオ学習教材の活用評価より—. 石川看護雑誌 9. 43-51
- 勝原裕美子, ウィリアムソン彰子, 尾形真実哉. (2005). 新人看護師のリアリティ・ショックの実態と類型化の試み—看護学生から看護師への移行プロセスにおける二時点調査から—. 日本看護管理学会誌 9(1). 30-37
- 小西美里. (2013). 日本の看護教育におけるOSCEの現状と課題に関する文献レビュー. 上武大学看護学部紀要 8 (1). 1-8
- 厚生労働省. (2014). 新人看護職員研修ガイドライン【改訂版】. 参照先: 厚生労働省: <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html> (2021年12月1日現在)
- 松浦和代, 大野夏代, 田中広美他. (2014). 大学が主催する新人看護職員の「社会化」の支援① 札幌市立大学看護学部「往還型研修」とは. 看護管理 24 (1), pp 61-69.
- 日本看護協会. (2021). 2020年度 病院看護実態調査報告書. 参照先: 日本看護協会: <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/96.pdf> (2021年12月1日現在)
- 雄西智恵美, 茶園美香, 佐藤正美他. (2006). 看護学教育研究の動向—その2. 「日本看護学教育学会」学術集会講演集における研究取り組み視点の分析. 日本看護学教育学会誌 15 (3). 65-74
- 大野夏代, 神島滋子, 多賀昌江他. (2014). 大学が主催する新人看護職員の「社会化」の支援② 卒後2年目までのシャトル研修. 看護管理 24 (2), pp 159-165.
- 佐居由美, 松谷美和子, 平林優子他. (2007). 新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方. 聖路加看護学会誌 11 (1). 100-108
- 山海千保子, 浅川和美, 角智美. (2010). 看護学生がOSCE実施時に経験する緊張の要因と影響. 茨城県立医療大学紀要 15. 14-25
- 清水裕子, 横井郁子, 豊田省子他. (2008). 看護教育における模擬患者 (SP; Simulated Patient・Standerdrized Patient) に関する研究の特徴. 日本保健科学学会誌 10 (4). 215-223
- 武村雪絵. (2016). ミッションマネジメント. 対話と信頼による価値共創型の組織づくり. (p115). 医学書院
- 田辺満子, 小森春佳. (2019). 岐阜県立看護大学が取り組む「卒業生支援・キャリア形成支援事業」の実績と成果. 岐阜県立看護大学紀要. 105-112
- 梅井凡子, 沖田一彦, 大塚彰他. (2013). 理学療法教育における屋根瓦式教育の試み—学内における理学療法過程演習への導入—. 理学療法科学 28 (3). 311-315
- 渡邊由香利, 中村恵子, 吉川由希子. (2011). 模擬患者を取り入れた教育を見直すPart2—大学において模擬患者をいかに活用するか— OSCEを中心に. 看護教育, 52 (8), pp586-592.
- 吉村恵美子, 青柳美秀子, 美田誠二他. (2010). 卒業生支援への一考察—川崎市立看護短期大学卒業生の学習ニーズ、役割受容度の実態調査から—. 川崎市立看護短期大学紀要. 87-93

Relearning of new nurse who participated in the educational program at the alma mater as simulated patients

Tomomi Miyaguni ¹⁾, Takehiro Koura ²⁾, Takako Higa ³⁾, Naoko Uema ³⁾

Abstract

Purpose: To clarify the realizations made by new nurses when they participate in training at their alma maters as simulated patients (SP) and to develop an idea of what kind of support basic nursing training institutions can provide to their graduates.

Methods: The research participants were new nurses who had graduated from School A and were working at a general hospital who were willing to participate as SPs and who were willing to participate in the research. Data was collected by having the participants fill out a self-administered questionnaire immediately after completing their role as SPs, and then holding semi-structured interviews in a group format about their experiences as SPs two weeks afterwards. The numeric data on the self-administered questionnaire underwent simple tabulation. Data extracted from the free response section of the questionnaires and the verbatim transcripts of the semi-structured interviews was subjected to qualitative descriptive research.

Results: There were 17 participants in the research. 21 subcategories such as "I experienced the same things the students are going through so I understand their feelings" were extracted from the self-administered questionnaire, and 19 subcategories such as "I was able to confirm my own growth by comparing myself to the students" were extracted from the semi-structured interviews. After a comparative consideration of all the subcategories, 11 subcategories about realizations made through the experience of participating in training as an SP, such as "I was stimulated by the response of the students and felt like I had gone back to the basics," were extracted. In addition to the realizations that new nurses made about education from their experience participating in training at their alma maters as SPs, they also returned to the basics by sharing the same experience as the currently-enrolled students, and realized their own growth. They also made other realizations from returning to their alma maters and reflecting on and reconsidering a nurse's work at a time when they were so busy with practical duties that they had neglected nursing.

Conclusion: Through their experience participating in training at their alma maters, the new nurses returned to the basics and realized their personal growth. It also became clear that, as they performed their role as an SP, they learned various things from changing their viewpoints from a student's to a patient's to a nurse's. In the future, it is necessary to consider the timing and methods for new nurses to participate in the basic training at their alma maters when basic nursing training institutions support their graduates. This research suggests that the timing and methods need to be reconsidered through the cooperation between basic nursing training institutions and clinical institutions.

Key Words: new nurse, simulated patient, alma mater, supporting nursing graduate

1) Okinawa Prefectural College of Nursing

2) Gushikawa Nursing School

3) Former Gushikawa Nursing School